

世界の貧困 わたしたちにできること

ふじた きよのり
藤田 清憲

●自動車総連 副事務局長

先日、2019年12月に逝去された中村哲さんの追悼番組を見る機会がありました。

中村さんは、アフガニスタンで医療活動に従事される中、診療所に運び込まれる人たちが後を絶たないことに思い悩みます。原因は、新鮮な水の不足、干ばつによる深刻な水不足で、泥水を飲み、汚染されたものを食すことでした。水不足の結果、農業もできず、農民同士が水を巡って争うこともありました。中村さんは、「100の診療所より1本の用水路が重要」と説き、7年かけて干ばつ地に25kmの用水路を手作業に近い技法で完成させ、3000ヘクタールの干ばつ地が農地になりました。結果として、病気が減っただけではなく、家族を養うためテロや麻薬組織に参加していたお父さんが家に帰ってきて農業に従事し始めます。1本の用水路が幾つもの社会問題を解決しました。まさに偉業とはこのことです。

世界銀行の定義する絶対的貧困者とは、1日わずか1.9ドル以下で生活する人々のことです。その数は全世界で7億人を超え、世界人口の10%に当たります。教育も十分に受けられず、仕事にもつげず、環境の悪さから伝染病に感染しても医療も受けられません。また、絶対的貧困者とは別に、相対的貧困者と定義される人々も存在します。国の所得の中央値の半分未満に当たる人々のことで、日本を含む先進国にも多くおられ、日本では約7人に1人の子供が相対的貧困にあたり、OECD加盟国の中でも最低水準といわれます。このように、貧困は世界中

に存在します。

さて、グローバル社会に生きる私たちはこのような貧困問題に対して何が出来るのでしょうか？

中村哲さんは、病気や貧困という課題を7年におよぶ用水路建設という手段で農業収入を増やして多くの社会問題を解決した、結果としてはこういう見方もできるかもしれません（ご本人は、「ただアフガニスタン人の命を救うために用水路を作った」と語られていましたが）。当たり前のように、貧困を解決するには所得を上げることが重要だと言われます。では、どういう手段でそれを達成することができるのか。

私が所属する自動車業界含め多くの日系企業がグローバルに事業展開しています。世界の労働事情をみると、児童労働、過酷な労働条件、不当労働、低賃金、危険労働など、課題が山積です。このような課題に多国籍企業がサプライヤーを通して知らず知らずに関与してしまっているケースなどは、意図せず貧困問題に加担してしまっているとも言えます。日系企業も他人事ではありません。改めて、国際労働運動の重要性を「貧困」という切り口で考えさせられます。また、日本国内の労働事情をみても世界と同様の課題が多く存在しているわけで、国内外の労働組合の活動が結果として貧困問題の解決に寄与する手段になるのではと、中村哲さんの偉業に思いをはせ、微力ながら自分に出来ることを考えてみるどころです。